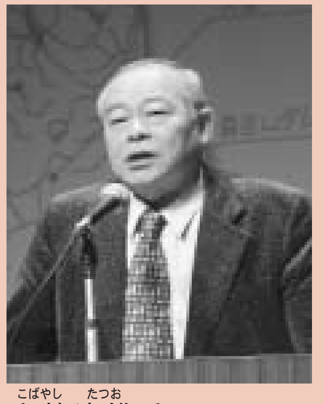
●縄文シンポジウム講演

「人間史の中の環状列石」

シンポジウムでは、伊勢堂岱遺跡調査指導委員会の委員長なども務める縄文文化研究の第一人者・國學院大学の小林達雄教授による講演が行われました。小林教授は、「環状列石を含め、遺跡の成り立ちや作られるまでの過程を知ることは、縄文人の『こころ』を知ること」などと環状列石が縄文人の精神世界を理解する鍵となることを述べていました。この講演の要旨をご紹介します。

狩猟や魚取り、山菜取りだけで高い文化を維持していた縄文人

最近、縄文文化が多くの皆さんの関心を引いています。それに呼応するかのように研究も進み、縄文人は高い文化を持っていたこともわかってきました。そのような文化には、安定した食料生産方法である農耕が当然あったと思われますが、縄文時代に農耕はしていませんでした。小規模な栽培はしていましたが、全面的に依存するようなものではありませんでした。狩猟と魚取り、それから山菜取りなどをバランスよく組み合わせていたんですね。



小林達雄（こばやし たつお）氏

國學院大学教授。1937年新潟県に生まれる。東京都庁、文化庁文化財調査官などを歴任。伊勢堂岱遺跡調査指導委員会委員長。

ところが研究が進むと、あれだけ高い文化を持っている縄文人が農耕を抜きにして文化を維持できるはずがない、狩猟と、あとは山菜を食べている程度だったらそんなことできやしないだろうという見方が出てきます。この見方は実は研究者の間でも多いんですね。しかし、農耕はしていなかったけれども食料は十分にあり、生活は安定していたのが縄文社会なのです。

同時代、世界的に見ても他の集団に負けない文化を持っていた

世界的に見ても、縄文人ほど農耕抜きの文化を築き、1万年もの間維持してきたという集団はほかに例がありません。最近の研究では縄文時代早期の終わり頃には、すでにウルシを使い始めていたという報告もあります。お隣の中国文化と比べても匹敵するくらいの古さを持っています。ウルシも持っていますし、あのすばらしい縄文土器を作って、次から次へと発達させてきました。縄文人は同時代の他の集団に負けない文化を持っていたとみてもよいと思います。

「ムラ」を営むことで自覚するようになった「内と外」という

しかし、縄文時代についていろいろわかってくると、何か欠けているものがあるような気がしてならないんですね。それは一言で言うと縄文人の「こころ」の問題です。ストーンサークル（環状列石）や石棺墓など、作られたものだけをみても縄文人のこころというものはなかなかわかりません。

縄文時代は、今から1万5千年くらい前から幕を開けますが、その前の旧石器時代との大きな違いは「ムラ」を営むようになったことです。自分たちがここぞと決めた自然の一角を切り取って、あるいは自然から「略奪」して人間のものにした、というのがムラの始まりというふうに見ることができます。これは、たいへん大きな人類の歴史の中での出来事で、これを私は『縄文革命』と呼んでいます。

このようにしてムラを作ると、その中には住みかを設けるようになります。「竪穴住居」はその典型的なものの一つです。そして、より充実した生活を送ることができるように食べ物の保管場所や、共同墓地、ゴミ捨て場や広場を設けます。その分だけ自然がだんだん追い出され、人工的な色彩が強まってゆきます。こうして彼らの頭の中に、ムラの「内と「外」という概念が徐々に定着していったのではないかと思います。

縄文人を知るには行動を意味付ける彼らの「言葉」を意識すべき

また彼らは、当然縄文日本語を話していたはずです。当時の人々や文化を知るには、このような概念や行為を伝える手段である言葉というものをもっと意識すべきだろうと思います。言葉は、物のほかに竪穴住居の中の内と外、ムラの内と外のように、広く「内と外」という抽象的な概念を意味づけることができます。外からムラに戻ったときに、自分たちは外側にいる鳥や動物とは違うぞという自覚、つまり、「内」と「外」という意識を持った可能性が極めて強いと思います。

◀伊勢堂岱遺跡の環状列石に使われている石がどこから運ばれてきたかを示したもの。七日市の小猿部川や綴子川など、遠くは7㌔以上離れた場所から運ばれたことがわかっています。

人間であることを表現するための造営物「ストーンサークル」

俺たちは動物ではない、人間だという意識が高まってくると、今度は自分たちがヒトであることの証拠を作るようになります。これが記念物でありモニュメントです。今日のテーマになっているストーンサークルは、まさにそれなんですね。

小牧野や伊勢堂岱遺跡でもそうですが、縄文人はストーンサークルを作るために重い石を苦労して遠くから運んでいます。腹の足しにはならない非生産的な行為ですが、あれを造ったということはまさに「こころ」の問題で、造りたいという動機があるわけです。

縄文人は竪穴住居を造っています。しかし、鳥や獣の巣よりは幾分構造的になっていますが、蜂の巣やアリの一種が作る大きな巣に比べると、単純なものです。住居では自然と差別化できているとは言えません。そのため別のもので自然とは違うぞ、と表現するものがどうも記念物であり、ストーンサークルなのです。それは彼らの世界観を表したもので、はじめは「俺たちは人間としていろんなことを考えているよな」という議論をしたと思います。

遺跡は、当時の人々の「こころ」を知るための大きな手がかり

しかし、どう表現したらいいかわからない。そこで、石をそこに置いてみると丸い形になった。「ああ、これだ、これだ」と、ちょっとでも世界観にひっかかるところがあると、「これだよ」と、具体的な形で言葉では言い尽くせないことを引き出すことに成功していったと言えます。まさにそれが「世界観」なのです。透明人間は目で見ることができませんが、包帯を巻くと見えてくる。それと同じように、丸で象徴される世界観を形にしてしまえばもうこれは明確なものになります。

環状列石のような記念物は、それを作ることによって人々が結束します。そして、過去（先祖）と現在（自分たち）、現在と未来、子々孫々という考えというものが生まれます。またそれは、言葉となって伝達されて縄文人の精神世界を形作って行きます。ストーンサークルには、そういった縄文人の「こころ」を知る大きな手がかりとなるものなのです。

▲伊勢堂岱遺跡の石組み

この石組みは、小牧野遺跡で見られる「小牧野式配石」と呼ばれる特異な石の並べ方をしており、同遺跡との何らかの情報交流があったものと推測されている。